



原発事故で全町民避難の福島・浪江町 常福寺

10年ぶり「お寺で報恩講」

2011年3月11日に起きた東日本大震災からまもなく10年を迎える。東京電力福島第一原発事故で全町民が避難を強いられた福島県浪江町の常福寺に昨年11月29日、10年ぶりの「お寺での報恩講」を喜ぶ廣畑恵順住職(52)と門徒の姿があった。それに先立つ11月18日には、大震災後の同寺の拠点となった福島市の福島県復興支援宗務事務所でも報恩講が営まれた。2つの報恩講を訪ね、「大震災から10年の今」を聞いた。

復興への「今日が第一歩」

震度6強の激しい揺れに見舞われた常福寺は、本堂が半壊、庫裏・客殿が全壊認定の被害を受けた。福島市で避難生活を送る廣畑住職は、大震災の翌年2月に宗派が開設した福島県事務所を拠点に法務を行ってきた。原発から8km地点にある同寺の避難指示が解除されたのは2017年3月31日。そこから、境内の除染やライフラインの復旧を経て、昨年3月に被害が軽微だった庫裏の離れの1階に内仏を設けて法務を再開した。

11月29日、大震災前に行っていた10年ぶりとなる自坊での報恩講に、廣畑住職は「多くの方々にご支援を

いただいた。その方々の思いを受けて、今、私たちがこうして正信偈をおつとめし、お念仏を申させていただけると感無量の表情で挨拶した(写真上)。

郡山市で避難生活を続ける清水登美子さん(93)は、親戚の清水水弘さん(68)と一緒に参拝した。大震災が起きるまでの75年間、浪江町で暮らしてきた登美子さんは「報恩講が待ち遠しかった。こうしてみんなでおつとめできてありがたかった。やっぱり浪江はいい。できれば浪江に戻り、また農業をやりたい」と話した。

11月末現在で浪江町に戻った住民は958世帯1529人。大震災前の町民人口の8.6%に過ぎない。常福寺の門徒で帰還したのは10戸余りだ。

その中の一人、建築業を営む境宣勝さん(78)は、避難指示解除後に浪江町に戻り、自宅を再建した。家を設計した長男・貴宣さんは5年ほど前、44歳で亡くなった。「息子の思いを受け継いで、彼が設計した家を私が建てた」と貴宣さんを偲ぶ。「また、こうして浪江のお寺にみんなが集えるようになってよかった。今

話す。修復費用の6割は東京電力の賠償金、宗派からの見舞金や義援金も費用にあてる予定だ。

避難先の福島県・飯坂温泉から、101歳で亡くなった母・ヒデさんの納骨に訪れた高橋昭太郎さん(77)は「お寺の存在は心の支え。随分とお世話になっていたのでね。ようやく本堂などが修復されるのことで安心した」と安堵の表情を浮かべた。

日のお寺が第一歩。第一歩が無ければ次の第二歩はない」と、常福寺の本格的復興に思いを寄せた。

廣畑住職は、東京電力との賠償交渉がようやくまとまったことを受け、今年度中に本堂修復に着手しようと考えている。「境内の除染も済み、本当は昨春から始めたいと思っていたが、コロナで延びてしまった。柱などがゆがむ建物の修復に1年。ご本尊や仏具、お内陣の修復に1年。並行して庫裏も新築できれば」と